

日常の先にある風景

普段、住宅を設計するときには、「みんなが集まって一家団欒」という風景ではなく、「なんとなく集まっているけど、それぞれが自由気まま」な風景を想像します。公園の大きな樹木の下にたまたま居合わせた他人同士が、それぞれ思い思いに過ごしているような、ゆるい関係性を思い描きます。お施主さんとの会話を重ねたり、自分事に置き換えて考えたりしたときに、現代における家族の変様をそんな風を感じとっているからかもしれません。昨今、家族のあり方は血縁関係を超えてさまざまな形で見直されていますが、僕の思う家族的な風景とは、「なんとなく同じ空間に居られること」です。さりげない日常にこそ、家族たらしめる風景があると考えています。

住宅街のコミュニティにも、そうしたさりげない日常を潜ませることがとても重要であると感じます。よくすれ違ったり、なんとなく顔見知りであるとか、たまたま居合わせるといった、時間をかけた自然な関わり合いの先に、継続的で成熟したコミュニティが育まれると考えているからです。

では、そうしたコミュニティを実現するためにはどのような場所が相応しいでしょうか。ひとつは、小さな居場所をいくつも重ねて全体をつくっていくことにあると考えています。数人で集まったり、一人で過ごしたり、違う目的の人間同士が同じ空間に居られる、見えがくれする居場所です。風景は少しずつ変化していき、常に更新されていく、小さなまちのような居場所です。もう一つは、境界が曖昧であることです。つい立ち寄ってしまう場所。境界を感じずに、街をそのまま引き込んだような場所を目指せると良いのではないかと思います。住宅街に現れる小さな「いちこや」は、さりげない日常の先にある風景に寄り添ったものでありたいと考えています。